東京国立博物館のインクルーシブ・プロジェクト

インクルーシブ
(inclusive)
とは、**「包括的な」**という
意味の言葉です。
どんな人も包み込むような、
やさしい博物館を
目指します

The Tokyo National Museum Inclusivity Project





東洋館で視覚障害者向けの取り組み、始めました！





東京国立博物館は、未来へ向けてサステナブルでインクルーシブなミュージアムを目指すため、「東洋館インクルーシブ・プロジェクト」をスタートしました。その第1弾として、2025年の「博物館でアジアの旅」期間中、視覚障害の方も楽しめる音声ガイドやハンズオン展示を展開し、研究員との対話による「おしゃべりフリーな鑑賞会」も開催しました。その様子を紹介いたします。

The Tokyo National Museum has launched the “Asian Gallery Inclusivity Project” to further our goal of becoming a sustainable, inclusive museum. As the first phase of this project, several initiatives were introduced in 2025, during the annual thematic exhibition *Journey through Asia at the Tokyo National Museum*. To ensure visitors with visual impairments could fully enjoy the exhibition, the Museum offered audio guides, hands-on displays, and hosted gallery talks that encouraged visitors to freely talk with curators. Please allow us to introduce these initiatives.

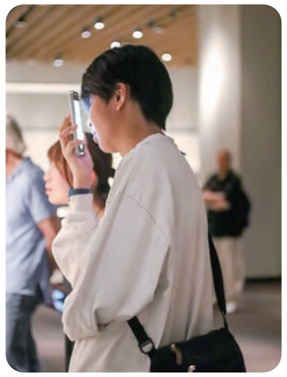
1 東洋館の見学会を開催しました

視覚障害の方と同行者をお招きして、3回にわたり、東洋館の見学会とヒアリングを行ないました。協力をお願いしたのは、ミカンベイビーが運営する福祉コミュニティ型ラボ「SFC-IFC」の皆さんです。



東洋館の教育普及スペース「オアシス」を体験しました





目が見えにくい方は、スマートフォンの拡大アプリを使って作品を鑑賞します



ミカンベイビー代表
寺澤 裕太さん

インクルーシブな博物館は、設備を整えるだけでは足りません。継続的に人と人が対等に話し、気づき、試し、また見直す。ミカンベイビーはその循環を大切にしながら、誰もが「ここにいていい」と思えるミュージアムの未来を探求します。

見学会の後は研究員がヒアリングしました



池内 風香さん
(SFC-IFC)

健常の皆さんと同じように博物館を楽しむことにハードルを感じていましたが、視覚障害者の困りごとや要望に丁寧に向き合っていただき、鑑賞を満喫したり、他の人と楽しみを共有できたりする場が増えてうれしく思います。

見学会やヒアリングを通して、当事者や同行者の方々の多様な意見に触れました。空間構成・展示手法・解説内容を工夫し、来館者ひとりひとりが「安心感」を抱ける博物館作りを目指します。



考古担当研究員
市元

気づきと改善点

当事者の皆さんからは、複雑な構造の東洋館では自分がいまどこにいるかわかりにくい、展示室内が暗い、さわれる展示がほしいといった意見が寄せられました。また、同行者の皆さんからは、作品解説が難しいとか、当事者に説明する自分の声が大きすぎないか不安になったといった声がありました。このヒアリングが「博物館でアジアの旅」で展開したハンズオン展示と「おしゃべりフリーな東洋館」のスローガンにつながりました。

2 ハンズオン「漢字の〈手〉をさわってみよう!」

漢字を体感してみたい！という当事者の声を受けて、「手」という漢字を取り上げたアートカード式のハンズオン展示を制作しました。3000年以上も前に中国で生まれた漢字は、長い時間をかけて書きやすさや美しさが工夫され、五つのスタイル（書体）ができました。金属、石、木にあらわされた「手」をさわると、その素材と書体の違いから長い歴史も体感できました。



河合純一さん（当館アンバサダー、スポーツ庁長官）が体験しに来てくださいました



篆書(金属)　隷書(石)　草書(木)　行書(木)　楷書(木)

制作協力：大曽根俊輔、河内晋平（studio「仕組」）、くんカンパニー、齋藤名穂（UNI DESIGN）、冨長敦也、半田こづえ



書跡担当研究員
六人部

古代の篆書は青銅器の文字を、篆書から生まれた隷書は石碑をイメージして、金属と石で作りました。隷書から生まれた草書・行書・楷書は、木簡や紙のイメージから木を素材に選びました。形とさわりごこちの違いから、漢字を楽しみました。

点字と漢字とは

3000年以上前に生まれたといわれる漢字に比べると点字は200年前に生まれた年若い兄弟のような文字です。漢字が形象化された意味をあらわし、書体の変遷が人と文字とのかかわりを示すものと考えると、点字は世界を音でとらえ、それを限られた6個の点で表現した、人類の知恵の結晶と考えることもできます。



私には視覚障害があり普段漢字を目にする機会がありません。今回「手」の漢字に触れて、文字の中に形象化された意味を深く感じました。美しい形の漢字とともに小さな点でできた点字が誇らしそうに博物館の中に展示されている姿に感銘を覚えました。

半田 こづえさん
(美術鑑賞研究者)



長年私がデザインしてきた「さわるアートカード」を東洋館で作ってみよう、というところからスタートして、漢字の発展を素材と文字のカタチで伝える、研究員と工芸家とユーザーとデザイナーが協働する、博物館らしい素敵な実現ができたと思います。

齋藤 名穂さん（建築家／デザイナー　UNI DESIGN）



3 「おしゃべりフリーな鑑賞会」



5階の「朝鮮半島の陶磁」の展示を一緒に楽しみました

東洋館の見学会のヒアリングで同行者の方から寄せられたご意見を参考に、「博物館でアジアの旅」の期間中、「おしゃべりフリーな東洋館」というスローガンを掲げました。作品鑑賞にあたり、視覚障害の方は同行者との対話が重要です。そして「おしゃべりフリーな鑑賞会」では、研究員とおしゃべりしながら東洋館の各フロアをまわり、展示作品の魅力を楽しみました。



4階の「中国の書跡」の展示室で漢字のハンズオン展示を体験後、作品を鑑賞しました



考古担当研究員 **玉城**

「静かにする場」というイメージの強い博物館ですが、対話を通してひとりでは気づかなかった視点に触れる楽しさを発見しました。対話を必要とする方にも静かに鑑賞したい方にも配慮し、誰もがここちよく過ごせる場を目指します。



袴田 久美子さん (SFC-IFC)

解説を聞きながら、誰かと話しながら、博物館を巡るという楽しさがあることを知りました。見ることが難しくてもほかの五感をフルに活用しながら、古今東西の文化に触れることができ、より世界が広がったように感じました。

挑戦中！ これからのプロジェクト



東洋館入口に新たに設置したサイコロのハンズオン展示。サイコロをふって、東洋館を旅してみてください。



「色」について考えながら、さまざまな道具をさわる勉強会などをしています。



陶磁担当研究員
三笠

2026年、今年の「博物館でアジアの旅」のテーマは「カラフルアジア」です。プロジェクトチームでは、当事者の方をお招きして、色彩にかんする勉強会を重ねています。また、新しい音声ガイドやワークショップも準備中です。どうぞお楽しみに！

TNM 東京国立博物館のインクルーシブ・プロジェクト
令和8年（2026）9月14日発行

企画・執筆：三笠景子、市元塁、玉城真紀子、六人部克典（以上、東京国立博物館）
寺澤裕太、池内風香、袴田久美子（以上、ミカンベイビー合同会社）
齋藤名穂（UNI DESIGN）、半田こづえ
撮　　影：ミカンベイビー合同会社、東京国立博物館　　翻訳：ダニエル・モラン、蒋天怡（東京国立博物館）
デザイン・制作・印刷：アイワード　　イラスト：柏木英利（アイワード）
編集・発行：独立行政法人国立文化財機構 東京国立博物館
©2026　東京国立博物館　Tokyo National Museum